

北サーミ語の自他交替についての諸考察

梅田 遼

ryo.umeda@student.oulu.fi

キーワード： 北サーミ語 フィン・ウゴル諸語 自他交替 自他両用動詞

要旨

本稿は北サーミ語の自他交替の諸特徴を Haspelmath (1993) および Nichols et al. (2004) に掲載されている動詞リストをもとに収集したデータに基づき記述する。本稿は北サーミ語の自他交替を形態的タイプから使役接辞、逆使役接辞、母音交替、補充法の4つに分類し、さらに Haspelmath (1993) および Nichols et al. (2004) の枠組みに基づいて交替の方向性について考察を行い、北サーミ語がおおむね使役化型の言語であると結論づける。また、Julien (2016) 等の先行研究では北サーミ語には自他両用動詞は存在しないと指摘されており、Haspelmath (1993) および Nichols et al. (2004) の動詞リストにも自他両用動詞は見られないが、リスト外の動詞から北サーミ語の新たな自他両用動詞と思われる例が観察された。これにはフィンランド語の影響が考えられ、新たな自他両用動詞の用法は北サーミ語とフィンランド語の言語接触およびバイリンガリズムによって生じた可能性が示唆された。

1. はじめに

本稿では北サーミ語¹の自他交替の諸特徴を筆者が収集したデータに基づき記述する。北サーミ語には詳細な記述文法書 (Nielsen 1926, Nickel 1990, Nickel and Sammallahti 2011) が存在し、動詞の派生についても詳細な記述がある。しかしながら、自他交替に関しては、理論的立場からは分散形態論 (Distributed Morphology) の枠組みによる Julien (2007, 2015, 2016) の研究が存在するものの、言語類型論の立場から北サーミ語の自他交替について言及した研究は存在しない。本稿では言語類型論的視点から北サーミ語の自他交替の諸特徴について記述を行うとともに、先行研究では存在しないと指摘されていた北サーミ語における自他両用動詞について報告する。

¹ 北サーミ語はスカンディナヴィア半島北部で話されるフィン・ウゴル語族フィン・サーミ語派サーミ諸語に属する言語。話者数はおよそ2万人で、その多くがノルウェー語・スウェーデン語・フィンランド語いずれかの言語と北サーミ語とのバイリンガルである。主格対格型言語でSVOを基本語順とする。基本的な母音音素は/a e i o u/、子音音素は/p b t d k g t̪ d̪ c [ts] č [tʃ] z [dʒ] ž [dʒ] f v t [θ] d [ð] s š [ʃ] j h j [j] l h l [l] r h r [r] lj [lj] h m hm [m] n hn [ŋ] nj [n̊] ŋ/であり、母音・子音ともに複雑な形態音韻論的交替を示す。無声の阻害音は前有氣音化して発音される([hp], [ht], [hk], [hc], [hč]など)。正書法上のb d gは有声破裂音ではなく無声の破裂音である(ex. b [p], d [t], g [k])。長母音はáを除いて正書法上は書かれない。形態音韻論的交替については本稿では詳細を割愛する。なお、北サーミ語においては音節数の概念が形態音韻論上重要であり、語幹の音節数が偶数か奇数かによって異なる接辞が付加するなどの現象が見られる。なお、本稿では動詞は不定詞を見出し形とし、-tが不定詞のマーカーである。

データとしてはHaspelmath (1993) およびNichols et al. (2004) の自他交替動詞リストを基に、北サーミ語対訳辞典 (Sammallahti 1989, Sammallahti 1993, Sammallahti and Nickel 2006, Svonne 2013) を参照した上で動詞対を選定したものを用いる。Haspelmath (1993) の31の動詞対およびNichols et al. (2004) の18の動詞対に基づいた北サーミ語の自他交替対応リストは本稿の末尾にそれぞれ補遺1、補遺2として付してある。なお、動詞対のリストは2名の北サーミ語母語話者によってチェックしていただき、インフォーマントの意見を参考に作成した²。

本稿は以下のように構成されている。第2節では、北サーミ語の基本的な文法的特徴について記述する。第3節は自他交替に関わる現象を形態的観点から分類し、北サーミ語の自他交替に見られる4つのパターンである使役接辞・逆使役接辞・母音交替・補充法についてそれぞれ記述する。第4節では自他交替の方向性について考察する。第5節では北サーミ語の自他両用動詞について述べる。第6節は結語である。

2. 北サーミ語の文法的特徴

本節では、北サーミ語の文法的特徴についての概略を提示する。詳細な文法の記述は本稿の範囲を超えるため、ここでは本稿の現象に関する部分のみを扱い、主として基本的な形態音韻論的特徴と格体系を記述するにとどめる。

2.1 形態音韻論的特徴

北サーミ語はおおむね膠着的な言語であり、基本的には文法機能を担う接尾辞を付加することによって格標示や派生・屈折を行う。しかしながら、歴史的な音変化により語末の音が脱落した結果、共時的に見れば語幹の音交替のみによって文法的な変化が行われているケースも多い。たとえば、主格と属対格³における交替がそれにあたる。

(1)	a. <i>dállu</i>	b. <i>dálu</i>
	house.SG.NOM	house.SG.GA
	「家」（主格）	「家」（属対格）

主格形では二重子音となっている語幹の子音が属対格形では単子音となっている。このような語幹の子音の交替を子音階梯交替と呼び、北サーミ語においては超強階梯・強階梯・弱階梯の三段階の交替が見られる（吉田1996）。

² 2名ともフィンランド共和国ウツヨキ出身で、1名は60代女性、もう1名は20代男性のインフォーマントであり、両者とも北サーミ語とフィンランド語のバイリンガルである。調査の媒介言語はフィンランド語を用いた。なお、Haspelmath (1993) に基づくリストについては2名のインフォーマント双方からのチェックを受けているが、Nichols et al. (2004) に基づいたリストは20代男性のインフォーマントとのみチェックを行った。

³ 北サーミ語においてはフィン・ウゴル祖語の属格 (*-n) と対格 (*-m) が*-nに合流し、さらにそれが語末音脱落によって消失した結果、属格と対格が1つの格形に合流している (Korhonen 1981: 212)。本稿ではこの格を属対格と呼称し、GA (Genitive-Accusative) とグロス付けする。

また、子音の交替に加えて、母音も形態音韻論的交替を見せる。たとえば、二重母音 (*ie, uo, ea, oa*) が屈折パラダイムにおいてそれぞれ長い単母音 (*i [i:], u [u:], e [e:], o [o:]*) に変化する現象がある。以下に2つの例を挙げる。

(2)	a. <i>giehta</i>	b. <i>gihti-i</i>	([ie] > [i:])
	hand.SG.NOM	hand.SG-ILL	
	「手」（主格单数）	「手」（入格单数）	
(3)	a. <i>vuolgi-t</i>	b. <i>vulge</i>	([uo] > [u:])
	leave-INF	leave.PST.3PL	
	「去る」（不定詞）	「彼らは去った」（3人称複数過去形）	

以上のように、明確な文法的機能を持った接辞が特定できない、語幹の子音や母音の形態音韻論的変化のみによる屈折現象も多いため、北サーミ語は膠着的な言語でありながらも多分に屈折的な傾向をもつ言語といえる⁴。

北サーミ語の形態音韻論についての詳細な記述は本稿の範囲を超えるため、本稿ではこれ以上の詳細な記述は割愛する。

2.2 統語的特徴

北サーミ語は典型的な主格対格型言語であり、自動詞の唯一の項および他動詞の動作主項は主格で表され、他動詞の被動作主項は属対格で表される⁵。

北サーミ語には6つの文法格が存在する。以下に名詞 *viessu* 「家」 の曲用パラダイムを例示する。

表1 : *viessu* 「家」 の曲用パラダイム

	单数	複数
主格 (NOM)	<i>viessu</i>	<i>viesu-t</i>
属対格 (GA)	<i>viesu</i>	<i>viesu-id</i>
入格 (ILL)	<i>vissu-i</i>	<i>viesu-ide</i>
位格 (LOC)	<i>viesu-s</i>	<i>viesu-in</i>
共格 (COM)	<i>viesu-in</i>	<i>viesu-iguin</i>
様格 (ESS)		<i>viessu-n</i>

⁴ 本稿のグロスにおいては、明確に形態素が分析できる場合ハイフンにより形態素境界を示し、グロスにおいても形態素ごとの分析を付したが、明確に形態素が分析できない場合は境界を示さず、グロスにおいてはピリオドで文法的機能を区切るのみとした。

⁵ フィンランド語やエストニア語に見られるような主格目的語は北サーミ語には存在しない。また、北サーミ語にはフィンランド語やエストニア語に見られるような分格も存在せず、したがって属対格が直接目的語となる唯一の格となる。

以下、それぞれの格の用法について簡潔に述べる。

北サーミ語において主語は常に主格となる。

(4)	Bárdni	<i>viehká</i>	<i>skuvli-i.</i>
	boy.SG.NOM	run.PRS.3SG	school.SG-ILL
「少年は学校へと走っていく」 (Svonni 2015: 49)			

属対格は大まかに言って連体修飾的な属格的機能 (5) と直接目的語となる対格的機能 (6) の2つを持つ。

(5)	Bártni	<i>sihkkel</i>	<i>lea</i>	<i>fiskat.</i>
	boy.SG.GA	bike.SG.NOM	be.PRS.3SG	yellow.SG.NOM
「少年の自転車は黄色だ」 (Svonni 2015: 50)				
(6)	Mii	<i>borrat</i>	<i>guoli.</i>	
	1PL.NOM	eat.PRS.1PL	fish.SG.GA	
「私たちは魚を食べる」 (Svonni 2015: 52)				

入格と位格はそれぞれ方向格と場所格であり、入格は着点を (7) 、位格は場所 (8) と起点 (9) を表す格である⁶。また、入格は受益者を表す与格的機能を持ち (10) 、位格は奪格的機能を持つ (11) 。また、位格は所有構文において所有者を表すのにも用いられる (12) 。

(7)	Sii	<i>vulge</i>	<i>gávpogi-i.</i>
	3PL.NOM	leave.PST.3PL	city.SG-ILL
「彼らは街へと発った」 (Svonni 2015: 53)			
(8)	Mun	<i>oru-n</i>	<i>Kárášjoga-s.</i>
	1SG.NOM	live.PRS.1SG	Karasjok-LOC
「私はカラショーカに住んでいる」 (Nickel 1990: 496)			
(9)	Sii	<i>vulge</i>	<i>Jiellevári-s</i>
	3PL.NOM	leave.PST.3PL	Gällivare-LOC
「彼らは月曜日にイエッリヴィアーレから出発した」 (Svonni 2015: 56)			
(10)	<i>Olbmo-t</i>	<i>adde</i>	<i>sutnje biepmu.</i>
	man-PL.NOM	give.PST.3PL	3SG.ILL food.SG.GA
「人々は彼／彼女に食べ物を与えた」 (Svonni 2015: 53)			

⁶ 北サーミ語においては、元來の場所を表す格と起点を表す格が一つの位格-s という形に合流してしまったため、位格が場所と起点の両方の機能を担う形になっている。

- (11) *Son* *oačču-i* *mus* *ođđa* *gahpira.*
 3SG.NOM get-PST.3SG 1SG.LOC new hat.SG.GA
 「彼／彼女は私から新しい帽子をもらった」 (Svonni 2015: 56)
- (12) *Ánne-s* *lea* *ođđa* *biila.*
 Ánne-LOC be.PRS.3SG new car.SG.NOM
 「アンネは新しい車を持っている（アンネには新しい車がある）」 (Svonni 2015: 55)

これら入格と位格は、以上の機能の他に、*liikot*「好きである」、*suhttat*「怒る」や*ballat*「恐れる」、*heaitit*「（～することを）やめる」等、他動性の低い動詞の項となることがある。

- (13) *Bárdni* *liiku-i* *niidi-i.*
 boy.SG.NOM like-PST.3SG girl.SG-ILL
 「少年は少女のことが好きだった」 (Svonni 2015: 53)
- (14) *Son* *suhta-i* *munnje.*
 3SG.NOM get.angry-PST.3SG 1SG.ILL
 「彼／彼女は私に怒った」 (Svonni 2015: 53)
- (15) *Mánná* *ballá* *beatnagi-s.*
 child.SG.NOM fear.PRS.3SG dog.SG-LOC
 「子供は犬を怖がっている」
- (16) *Heaitte* *huiki-mi-s!*
 stop.IMP.2SG shout-AN-LOC
 「叫ぶのをやめろ！」

共格は道具・手段（17）および随伴者（18）を表す機能を持つ格である。

- (17) *Son* *bodí-i* *skuvli-i* *ođđa* *sihkkeli-in.*
 3SG.NOM come-PST.3SG school.SG-ILL new bike.SG.COM
 「彼／彼女は新しい自転車で学校に来た」 (Svonni 2015: 57)
- (18) *Máret* *vuolgá* *su* *ustibi-in* *gávpogi-i.*
 Måret.NOM leave.PRS.3SG 3SG.GA friend.SG.COM city.SG.ILL
 「マーレットは友達と一緒に街へ行く」 (Svonni 2015: 57)

様格は「～として」という意味を表すとともに（19）、変化を表す動詞の補語となり変化後の状態を表す機能を持つ（20）。なお、様格には単数と複数の区別がない。

⁷ フィンランド語の変格-ksi の機能に相当する。

- (19) *Son* *lei* *taksivuoddji-n* *Oslo-s.*
3SG.NOM be.PST.3SG taxi.driver-ESS Oslo-LOC
「彼／彼女はタクシー運転手としてオスロにいた」 (Nickel 1990: 402)
- (20) *Majemus son* *šatta-i* *buorri-n* *oahpaheaddji-n.*
in.the.end 3SG.NOM become-PST.3SG good-ESS teacher-ESS
「最後には彼／彼女はよい先生となった」 (Nickel 1990: 403)

3. 自他交替の形態的タイプ

本節では、北サーミ語の自他交替の形態的特徴について記述する。

北サーミ語の自他交替には、形態的観点から見ると使役接辞付加・逆使役接辞付加・母音交替・補充法の4つのパターンが認められる。

- (21) 使役接辞付加
- a. *álgí-t* b. *álgga-hi-t*
begin-INF begin-CAUS-INF
「始まる」 「始める」
- (22) 逆使役接辞付加
- a. *gidda-ni-t* b. *gidde-t*
close-ACaus-INF close-INF
「閉まる」 「閉める」
- (23) 母音交替
- a. *goika-t* b. *goike-t*
dry-INF dry-INF
「乾く」 「乾かす」
- (24) 補充法
- a. *jápmi-t* b. *goddi-t*
die-INF kill-INF
「死ぬ」 「殺す」

使役・逆使役は交替の方向性が明確に認められる例であり、母音交替・補充法は交替の方向性が明確でない例である。交替の方向性が明確な使役・逆使役の例に関しては、すべてが接尾辞付加によるものである。

本節では、以上の4つのパターンについてそれぞれ記述していく。

3.1 使役接辞付加

本節では、使役化の機能を持つ接辞について記述する。

3.1.1 *-hit/-ahttit*

使役接辞-*hit/-ahttit*⁸は北サーミ語においてもっとも生産性の高い使役接辞である。この接辞は自他交替のペアにおいて自動詞に付加して使役動詞を派生するほか、他動詞にも付加することができる。

(25) は自動詞の構文から使役構文を派生した例である。この場合、使役者は主格、被使役者は属対格となって現れる。

- (25) a. *Máhtte* *viehká.*
 Máhtte.NOM run.PRS.3SG
 「マハッテは走る」
- b. *Máret viega-h-i-i* *Máhte.*
 Máret run-CAUS-PST-3SG Máhtte.GA
 「マーレットはマハッテを走らせた」 (Nickel and Sammallahti 2011: 582)

前述したように、この使役接辞-*hit/-ahttit*は他動詞の構文から使役構文を派生することもできる⁹。この際、使役者は主格、対象項 (theme) は属対格、被使役者は入格となって現れる¹⁰。

- (26) *Mun* *daga-h-i-n* *niibbi* *rávdá-i.*
 1SG.NOM make-CAUS-PST-1SG knife.SG.GA smith.SG-ILL
 「私は鍛冶屋にナイフを作らせた」 (Nickel 1990: 418)

自他交替においては、「始める」や「教える」、「煮える」、「転がす」などの動詞にこの接辞が用いられる。これらの動詞は典型的な自発性 (spontaneity) の高い動詞であり、このような自発性の高い動詞は自他交替のペアにおいて使役接辞をとりやすいという Haspelmath

⁸ -*hit* は偶数音節動詞につく形、-*ahttit* は奇数音節動詞および4音節の偶数音節動詞で自動詞が-*uvvat* で終わるものにつく形である。

⁹ しかしながら、Vinka (2002) は *gullat* 「聞く」、*oaidnit* 「見る」など動作主性の低い動詞について-*hit* を付加した使役構文が派生できないことを指摘している。

- (i) **Mun* *gula-h-i-n* *máná* *bajána.*
 1SG.NOM hear-CAUS-PST-1SG child.SG.GA thunder.SG.GA
 「私は子供に雷を聞かせた」 (Vinka 2002: 53)
- (ii) **Mun* *oainni-h-i-n* *máná* *bohccuid.*
 1SG.NOM see-CAUS-PST-1SG child.SG.GA reindeer.PL.GA
 「私は子供にトナカイを見させた」 (Vinka 2002: 54)

¹⁰ しかしながら、被使役者の格標示には方言差がある (Nickel 1990: 419)。たとえば Vinka (2002) によれば、トーネ方言 (主にスウェーデンで話されている変種) では被使役者は属対格で標示され、入格で標示することは不可能であるという。

- (i) *Mon* *cuvke-h-i-n* *Máhte* *láse.*
 1SG.NOM break-CAUS-PST-1SG Máhtte.GA window.SG.GA
 「私はマハッテに窓を壊させた」 (Vinka 2002: 1)

(1993) の述べる傾向に沿っている¹¹。

- | | | |
|------|--------------------|------------------------|
| (27) | a. <i>álgí-t</i> | b. <i>álgga-hi-t</i> |
| | begin-INF | begin-CAUS-INF |
| | 「始まる」 | 「始める」 |
| (28) | a. <i>oahppa-t</i> | b. <i>oahpa-hi-t</i> |
| | learn-INF | learn-CAUS-INF |
| | 「学ぶ」 | 「教える」 |
| (29) | a. <i>duolda-t</i> | b. <i>duoldda-hi-t</i> |
| | boil-INF | boil-CAUS-INF |
| | 「煮える」 | 「煮る」 |
| (30) | a. <i>fierra-t</i> | b. <i>fiera-hi-t</i> |
| | roll-INF | roll-CAUS-INF |
| | 「転がる」 | 「転がす」 |

また、自他交替において自動詞が-*uvvat* という語尾をとる動詞の他動詞形は必ず-*httit* となる。

- | | | |
|------|--------------------------|---------------------------|
| (31) | a. <i>nuppást-uvva-t</i> | b. <i>nuppástu-htti-t</i> |
| | change-INTR-INF | change-CAUS-INF |
| | 「変わる」 | 「変える」 |
| (32) | a. <i>ovttast-uvva-t</i> | b. <i>ovttastu-htti-t</i> |
| | connect-INTR-INF | connect-CAUS-INF |
| | 「つながる」 | 「つなぐ」 |

3.1.2 -*dit*

自他交替においては、もう一つの使役接辞-*dit* が見られる。この接辞は生産性に限りがあり、この接辞の付加することのできる動詞は語彙的に決まっている¹²。

¹¹ しかしながら、近年の Haspelmath らの研究では自発性と形式の関係よりも動詞の使用頻度と形式の関係の方が重要なファクターであるとみなされている (Haspelmath et al. 2014)。北サミ語においてこの説を検証するための十分なデータがないため、本稿ではこの議論について検討を保留する。

¹² 一部の動詞には使役接辞-*hit* と-*dit* の両方をとれるものが存在する (ex. *vuodjut* 「沈む」 > *vuolu-hit* 「沈める」、*vuodju-dit* 「沈める」)。筆者が調査したインフォーマントによれば、両者の使役動詞の間に意味の違いは見られないという。

- (33) a. *vuodju-t* b. *vuodju-di-t*
 sink-INF sink-CAUS-INF
 「沈む」 「沈める」
- (34) a. *sudda-t* b. *sudda-di-t*
 melt-INF melt-CAUS-INF
 「溶ける」 「溶かす」
- (35) a. *čáska-t* b. *čáska-di-t*
 go.out-INF go.out-CAUS-INF
 「消える」 「消す」

接辞-*dit* は自動詞に見られることもある。

- (36) a. *suga-di-t* b. *suga-hi-t*
 rock-FREQ-INF rock-CAUS-INF
 「揺れる」 「揺らす」

(36a) と (36b) のどちらの動詞も、もとは *suhkat* 「(ボートなどを) 漕ぐ」 から派生された動詞である。自動詞 *suga-dit* 「揺れる」 に見られる接辞-*dit* は「何度も～する」という意味の多回動詞 (frequentative) を派生する接辞であり¹³、ヴォイスに関わる接辞とは厳密には異なる。接辞-*dit* はしたがって多義的な接辞であり、使役化以外の機能も持つ¹⁴。

3.2 逆使役接辞付加

本節では、逆使役化の機能を持つ接辞について記述する。

3.2.1 -nit

接辞-*nit* は Julien (2016) によれば純粋な非対格動詞を形成する接辞であり、状態変化を表す動詞につく接辞である。

- (37) a. *gidda-ni-t* b. *gidde-t*
 close-ACAUS-INF close-INF
 「閉まる」 「閉める」

¹³ 北サーミ語にはこのように動詞のアスペクトに関わる派生接辞が多く存在する。

¹⁴ Korhonen (1981) によれば、現代北サーミ語で-*dit* となっている接辞の起源は少なくとも 4 つある。使役化の-*dit* はフィン祖語の*-ta/tä、多回の-*dit* はフィン祖語の*-nte である (Korhonen 1981: 329–330)。

- (38) a. *čoahkka-ni-t*
gather-ACAUS-INF
「集まる」
- b. *čohkke-t*
gather-INF
「集める」

- (39) a. *luodda-ni-t*
split-ACAUS-INF
「裂ける」
- b. *ludde-t*
split-INF
「裂く」

接辞-*nit* をとる自動詞の中には、他動詞の対として使役接辞-*dit* を有する動詞を持つものが多く存在する。すなわち Haspelmath (1993) のいう両極型交替 (equipollent alternation) の例である。これらの動詞対には、名詞または形容詞から派生された出名動詞 (denominal verb) が多く該当する。

- (40) a. *ovdá-ni-t*
develop-ACAUS-INF
「進む、発展する」
- b. *ovddi-di-t*
develop-CAUS-INF
「進める、発展させる」

- (41) a. *badjá-ni-t*
rise-ACAUS-INF
「上がる」
- b. *baji-di-t*
rise-CAUS-INF
「上げる」

- (42) a. *buorrá-ni-t*
good-ACAUS-INF
「よくなる」
- b. *buori-di-t*
good-CAUS-INF
「よくする」

- (43) a. *bisá-ni-t*
stop-ACAUS-INF
「止まる」
- b. *bisse-hi-t*
stop-CAUS-INF
「止める」

3.2.2 -*sit*

接辞-*sit* は伝統的な記述文法では受動接辞などと呼ばれている接辞である (Nielsen 1926, Nickel 1990)。

- (44) a. *rahpa-si-t*
open-ACAUS-INF
「開く」
- b. *rahpa-t*
open-INF
「開ける」

- (45) a. *jorga-si-t*
turn-ACAUS-INF
「回る」
- b. *jorgu-t*
turn-INF
「回す」

しかしながら、Julien (2016) は-sit は受動接辞ではないとしており、その理由として、-sit のついた動詞が *iešalddes* 「自分から、ひとりでに」と共に起できることを挙げている。

- (46) *Uksa rahpa-s-i-i iešalddes.*
 door.SG.NOM open-ACAUS-PST-3SG by.itself
 「扉はひとりでに開いた」 (Julien 2016: 417)

「ひとりでに」のような副詞は動作主の存在を含意する受動文とは相容れないことから、Julien (2016) の述べるように-sit は受動の接辞ではないという結論が妥当であろう。-sit はむしろ、ドイツ語の *sich* のような中動・再帰の機能をもつ接辞と考えられる¹⁵。

3.2.3 -ot

接辞-ot は記述文法では受動接辞-(*j*)uvvot の短形と記述される接辞であり、逆使役の機能を持つものの上に述べた-nit や-sit とは出自の異なる接辞である。-(*j*)uvvot は北サーミ語の生産的な受動接辞でありほぼすべての動詞に付加できるが、このうち、偶数音節動詞は-(*j*)uvvot の形と並んで-ot の形も持つ。

- (47) a. *doddjo-juvvo-t* b. *doddj-o-t* (<*doadji-t* 「壊す」)
 break-PASS-INF break-PASS-INF
 「壊される」 「壊れる」

-(*j*)uvvot と-ot の間には包含関係が成り立ち、-ot の形が存在する動詞には生産的な受動形-(*j*)uvvot の形も存在するが、-(*j*)uvvot の形が存在する動詞すべてに-ot の形が存在するわけではない。

Sammallahti (2005) や Nickel and Sammallahti (2011) によれば、(47a) と (47b) のような-(*j*)uvvot と-ot の動詞には形態的な違いだけではなく、意味の違いも認められるという。すなわち、-(*j*)uvvot が「誰かによって～された」と行為者の存在を含意するのに対して、-ot は「(自発的に) ～した」という、行為者の存在を含意しない読みになるという¹⁶。

¹⁵ ただし「自分に～する」という再帰の機能は接辞-sit ではなく前述の多回の-dit が用いられる。例：*bassat* 「洗う」、*basa-dit* 「(自分の体を) 洗う」

¹⁶ 北サーミ語では斜格項などによって受動文において動作主を明示することができないため、統語的な証拠が不十分であるのが実態である。Vinka (2002) はしかしながら、目的を表す節と-(*j*)uvvot を含む受動文が共起できることから、受動接辞-(*j*)uvvot を含む動詞は行為者性を含意すると主張している。

- (i) *Fanas vuolu-h-uvvu-i beahtti-n dihte*
 boat.SG.NOM sink-CAUS-PASS-PST.3SG cheat-AN for
 dáhkádussearvvi.
 insurance.company.SG.GA
 「ボートは保険会社を欺くために沈められた」 (Vinka 2002: 88)

- (48) a. *Oaksi* ***doddjo-juvvu-i.***
 branch.SG.NOM **break-PASS-PST.3SG**
 「枝が折られた（誰かによって）」 (Nickel and Sammallahti 2011: 564)
 b. *Oaksi* ***doddj-u-i.***
 branch.SG.NOM **break-PASS-PST.3SG**
 「枝が折れた」 (Nickel and Sammallahti 2011: 564)

筆者が収集した Haspelmath (1993) および Nichols et al. (2004) に基づく動詞のリストでは、上にあげた *doddjot* 「壊れる」を含む、以下の 2 つのペアが見つかった。

- (49) a. *doddj-o-t* b. *doadji-t*
 break-PASS-INF break-INF
 「壊れる」 「壊す」
(50) a. *lähpp-o-t* b. *lähppi-t*
 lose-PASS-INF lose-INF
 「なくなる」 「なくす」

なお、一部には前節に述べた接辞-*sit* と接辞-*ot* の両方が付加可能な動詞が存在する。たとえば *rahpat* 「開ける」からは *rahpasit* 「開く」、*rahppot* 「開く」、*rahppojuvvot* 「開けられる」という 3 つの逆使役派生が生成可能である。これらの 3 つの動詞の間には、*rahpasit* 「開く」および *rahppot* 「開く」は行為者の存在を含意しないが、*rahppojuvvot* 「開けられる」は行為者の存在を含意する、という意味の違いが存在するものの、*rahpasit* 「開く」と *rahppot* 「開く」の間にどのような違いがあるかは定かではない。

3.3 母音交替

Julien (2016) は北サーミ語に語幹の母音交替のみで自他交替を行う動詞のペアはないと述べているが、筆者の調査したところによると、母音交替によって自他交替を行うペアが少なくとも一つ発見された。

- (51) a. *goika-t* b. *goike-t*
 dry-INF dry-INF
 「乾く」 「乾かす」

また、語幹の母音の母音交替のほかに、語幹の第 1 音節の母音や子音が異なり、同一語彙素からの派生とは考えられないが、明らかに自動詞と他動詞の間に形態的関係がみられる例も散見される。

- (52) a. *buolli-t* b. *boal-di-t*
 burn-INF burn-CAUS?-INF
 「燃える」 「燃やす」
- (53) a. *leavva-t* b. *lebbe-t*
 spread-INF spread-INF
 「広がる」 「広げる」

Julien (2016) はこのような例を補充法だとしているが、次節に見るような全く形態的に関係していない自動詞と他動詞のペアと比較すると、上記のような例は典型的な補充法とは言い難い。本稿では、上記のような例は両極型 (equipollent, cf. Haspelmath (1993)) ないし中立型 (neutral, cf. Nichols et al. (2004)) の派生として扱った。

3.4 補充法

筆者が調査した中では、明確に補充法と見られる例は以下の 3 つのペアが見つかった¹⁷。

- (54) a. *jápmi-t* b. *goddi-t*
 die-INF kill-INF
 「死ぬ」 「殺す」
- (55) a. *nohka-t* b. *loahpa-hi-t*
 finish-INF finish-CAUS-INF
 「終わる」 「終える」
- (56) a. *oaidni-t* b. *čáje-hi-t*
 see-INF show-CAUS-INF
 「見る」 「見せる」

4. 交替の方向性

本節では、Haspelmath (1993) と Nichols et al. (2004) に基づく北サーミ語の自他交替動詞対のリストを検討した上で、北サーミ語の自他交替の方向性について考察する。

まずは Haspelmath (1993) のリストによる交替の方向性の傾向であるが、Haspelmath (1993) に倣い、各交替型の数と逆使役と使役の割合（使役型の数に対する逆使役型の数の割合）、無指向性ペアの割合（合計に対する交替型が E または L の数の割合）を表にまとめると以下のようになる。なお、参考までに、Haspelmath (1993) に挙げられている他のフィン・ウゴル諸語のデータを同時に掲載する。

¹⁷ *loahpahit* 「終える」 や *čájehit* 「見せる」 は使役接辞-*hit* を含むが、使役接辞なしの対応する自動詞は存在しない。

表2 : Haspelmath (1993) に基づく交替型のまとめ¹⁸
 (北サーミ語以外のデータは Haspelmath (1993) による)

	合計	A	C	E	L	S	A/C	無指向性ペアの割合
フィンランド語	28	12	13.5	0.5	0.5	1.5	0.88	9%
北サーミ語	31	8	9	11	0	3	0.88	45%
ウドムルト語	31	10.5	12.5	4.5	2.5	1	0.84	26%
ハンガリー語	31	7	9	12	0	3	0.78	48%

以上のデータを見ると、北サーミ語はおおむね他のフィン・ウゴル諸語の傾向と同じく、使役化が逆使役化よりも若干優勢な、使役化型の言語といえる。しかしながら、特筆すべきはこの中で北サーミ語ともっとも系統関係が近いフィンランド語との差で、北サーミ語においては両極型(E)の数がフィンランド語に比べて顕著に多いことに注目されたい。これは、Haspelmath (1993) の動詞リストのうち、北サーミ語において出名動詞 (denominal verb) により自他交替を作るペアが多いことに由来する。

次に、Nichols et al. (2004) のリストに基づき交替の方向性を検討する。Nichols et al. (2004) では、いわゆる自動詞 (Haspelmath (1993) のinchoative) をPlain、いわゆる他動詞 (Haspelmath (1993) のcausative) をInducedとし、PlainとInducedの対応関係としてAugmented (他動詞側に形態的な派生マーカーあり)、Reduced (自動詞側に形態的な派生マーカーあり)、Neutral (自動詞側も他動詞側も形態的な派生マーカーあり)、Indeterminate (補充法や自他両用動詞、屈折クラスの変化など) の4つを設定した上で類型論的な考察を行っている。

Nichols et al. (2004) に基づいて得られた北サーミ語の18の動詞対について、以上の4つの型に基づき自動詞 (Plain) と他動詞 (Induced) の対応関係について分類を行った結果を、下表にまとめる。

表3 : Nichols et al. (2004) に基づく自他対応関係のまとめ

Augmented	Reduced	Neutral	Indeterminate	合計
8.5	5	2.5	2	18

この表のうち、NeutralはDouble derivation (使役接辞と逆使役接辞の両方が認められるもの) とAblaut (母音交替) を含むが、IndeterminateはSuppletive (補充法) のみである。なお、一つのペアにおいて、AugmentedとNeutralどちらの可能性も考えられるものがあったため、このペアはAugmentedとNeutralに0.5点ずつとしてカウントした。結果として、使役化であるAugmentedの数が逆使役化であるReducedの数を上回っており、以上のNichols et al. (2004) に基づいたデ

¹⁸ 表中の略号 : A (Anticausative、逆使役型)、C (Causative、使役型)、E (Equipollent、両極型)、L (Labile、自他両用動詞) S (Suppletive、補充法)、A/C (使役型の数に対する逆使役型の数の割合)

一タからも、北サーミ語はおおむね使役化型の言語といえる。

以上のデータから、北サーミ語においては自他交替のパターンとして使役化が優勢であり、北サーミ語は使役化型の言語（transitivizing language）であると結論できる。

5. 自他両用動詞

前節までで、Haspelmath (1993) と Nichols et al. (2004) に基づく自他交替の動詞一覧をもとに北サーミ語の自他交替について記述した。これらの動詞一覧の中には、いわゆる自他両用動詞 (lable verb) が一つも含まれない。自他両用動詞とは、一つの動詞形が自動詞と他動詞の両方に用いられるような動詞であり、英語にはこのような動詞が数多く見られる。一方、北サーミ語においては、伝統的な記述文法には自他両用動詞の例は挙げられておらず、Julien (2016) も北サーミ語には自他両用動詞は一切存在せず、北サーミ語の自他交替は必ず形態的な実現を伴うと述べている (Julien 2016: 400)。しかしながら、筆者の調査によれば、少なくともフィンランド側で話される北サーミ語の変種には自他両用動詞が存在すると思われる。筆者が調査したインフォーマントによると、動詞 *stresset* 「ストレスを感じる／感じさせる」が自他両用動詞として用いることができるという。

- (57) *Mun stresse-n dán ášši-s/dán ášši dihte.*
 1SG.NOM stress-PRS.1SG this thing.SG-LOC/this thing.SG.GA
 for
 「私はこのことがストレスである（このことから／このことによってストレスを感じている）」
- (58) *Dát ášši stresse mu.*
 this.SG.NOM thing.SG.NOM stress.PRS.3SG 1SG.GA
 「私にはこのことがストレスである（このことは私にストレスを感じさせる）」

自動詞の用法では経験者項が主格主語となり、ストレスの原因となるものは位格ないし後置詞句で表される。一方、他動詞の用法は経験者項が属対格目的語となり、ストレスの原因となるものが主格主語となる、一種の非人称動詞的な用法である。なお他動詞に関しては、生産的な使役接辞-*hit* を伴う *stresse-hit* 「ストレスを感じさせる」という形式も可能である。

- (59) *Dát ášši stresse-h-a mu.*
 this.SG.NOM thing.SG.NOM stress-CAUS-PRS.3SG 1SG.GA
 「私にはこのことがストレスである（このことは私にストレスを感じさせる）」

上記に述べた *stresset* のような自他両用動詞が北サーミ語に存在する理由として、フィンラン

ド語の影響が考えられる。フィンランド語においても自他両用動詞はまれであるが、一部の動詞は形態的な形が同一でも自他両方の用法を持つ¹⁹。フィンランド語の *stressata* 「ストレスを感じる／感じさせる」はそのような動詞のうちの一つである。

- | | | | | |
|------|--------------------------------------|--------------------------|------------------------|------------------|
| (60) | <i>Minä</i> | <i>stressaa-n</i> | <i>tä-stä</i> | <i>asia-sta.</i> |
| | 1SG.NOM | stress-1SG.PRS | this.SG-ELA | thing.SG-ELA |
| | 「私はこのことがストレスである（このことからストレスを感じている）」 | | | |
| (61) | <i>Tämä</i> | <i>asia</i> | <i>stressaa</i> | <i>minu-a.</i> |
| | this.SG.NOM | thing.SG.NOM | stress.PRS.3SG | 1SG-PART |
| | 「私にはこのことがストレスである（このことは私にストレスを感じさせる）」 | | | |

(60) では経験者項が主格となり、ストレスの原因が「～から」を表す出格となっている。一方、(61) では経験者項は分格目的語となり、ストレスの原因是主格主語となっている。以上2つの文の構造は、それぞれ北サーミ語の文 (57) と (58) に酷似している。

筆者が調査したインフォーマントはフィンランド語と北サーミ語のバイリンガルであるため、北サーミ語の動詞 *stresset* の自他両用動詞としての用法は、フィンランド語の動詞 *stressata* の用法に影響を受けて生じた新たな用法である可能性がある。他にも、フィンランド語において自他両用動詞となっている動詞に対応する北サーミ語の動詞が、フィンランド語と北サーミ語のバイリンガルである話者によって自他両用動詞として使われている可能性は否定できないが、現在のところ他の例は見つかっていない。

北サーミ語の *stresset* のような動詞が自他両用動詞として用いられることは、フィンランド語との言語接触（またはバイリンガリズム）による影響の可能性を強く示唆する。この点を明らかにするためには、北サーミ語の他の変種（たとえばノルウェーやスウェーデンに居住する、ノルウェー語やスウェーデン語と北サーミ語を用いる話者によって話される変種）も調査する必要があろう。

6. おわりに

本稿では、北サーミ語の自他交替について、Haspelmath (1993) と Nichols et al. (2004) のリストを参考に収集したデータをもとに概要を記述し、交替の方向性について考察を行った。その結果、北サーミ語はおおむね使役化型の言語だと結論づけられた。また、Haspelmath (1993) と Nichols et al. (2004) のリストに自他両用動詞は見られないものの、Julien (2016) の記述に反して、北サーミ語にも自他両用動詞と思われる例が存在することを指摘した。この自他両用動詞の用法は、フィンランド語の影響によって新たに生じたものと考えられる。今後の課題としては、このような自他両用動詞が他にも存在するかどうか調査し、また、存在するとすれば

¹⁹ 他にこのようなフィンランド語の自他両用動詞の例として *rullata* 「巻く／巻かれる」などがある。

それが言語接触やバイリンガリズムの影響によるものなのかどうか、北サーミ語の様々な変種を調査した上で結論づけることが必要であろう。

参考文献

- Haspelmath, Martin (1993) More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In: Bernard Comrie and Maria Polinsky (eds.) *Causatives and transitivity*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, 87–120.
- Haspelmath, Martin, Andreea Calude, Michael Spagnol, Heiko Narrog and Elif Bamyaci (2014) Coding causal–noncausal verb alternations: A form–frequency correspondence explanation. *Journal of Linguistics* 50: 587–625.
- Julien, Marit (2007) Roots and verbs in North Saami. In: Ida Toivonen and Diane Nelson (eds.) *Saami linguistics*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, 137–166.
- Julien, Marit (2015) Theme vowels in North Sámi: Spanning and maximal expression. *Lingua* 164: 1–24.
- Julien, Marit (2016) Transitivity alternations in North Sámi. *Open Linguistics* 2: 400–426.
- Korhonen, Mikko (1981) *Johdatus lapin kielen historiaan*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- Nichols, Joanna. et al. (2004) Transitivizing and detransitivizing languages. *Linguistic Typology* 8: 149–211.
- Nickel, Klaus Peter (1990) *Samisk grammatikk*. Oslo: Universitetsforlaget.
- Nickel, Klaus Peter and Pekka Sammallahti (2011) *Nordsamisk grammatikk*. Karasjok: Davvi Girji.
- Nielsen, Konrad (1926) *Lærebok i lappisk I. Grammatikk: Lydlære, formlære, orddannelseslære og syntaks samt tillegg*. Oslo: A. W. Brøgger.
- Sammallahti, Pekka (1989) *Saamelais-suomalainen sanakirja*. Ohcejohka: Jorgaleaddji.
- Sammallahti, Pekka (1993) *Saamelais-suomalais-saamelainen sanakirja*. Ohcejohka: Girjegiisá.
- Sammallahti, Pekka (2005) *Láidehus sámegiela cealkkaoahpa dutkamii*. Kárásjohka: Davvi Girji.
- Sammallahti, Pekka and Klaus Peter Nickel (2006) *Saamisch-Deutsches Wörterbuch*. Karasjok: Davvi Girji.
- Svonne, Mikael (2013) *Davvisámegiela-ruotagiela, ruotagiela-davvisámegiela sátnegirji: Nordsamisk-svensk, svensk-nordsamisk ordbok*. Karasjok: CálliidLágádus.
- Svonne, Mikael (2015) *Davvisámegiella - sánit ja cealkagat: Láidehus sámi lingvistihkkii*. Giron: Ravda Lágádus.
- Vinka, Mikael (2002) *Causativization in North Sámi*. Ph.D. thesis, McGill University.
- 吉田欣吾 (1996) 『サーミ語の基礎』東京：大学書林。

略号一覧

ACAUS 逆使役化接辞(Anticausative)、AN 行為名詞(Action Nominal)、CAUS 使役(Causative)、COM 共格(Comitative)、ELA 出格(Elative)、ESS 様格(Essive)、FREQ 多回接辞(Frequentative)、

GA 屬対格 (Genitive-Accusative) 、ILL 入格 (Illative) 、IMP 命令形 (Imperative) 、INF 不定詞 (Infinitive) 、INTR 自動詞化辭 (Intransitivizer) 、LOC 位格 (Locative) 、NOM 主格 (Nominative) 、PART 分格 (Partitive) 、PASS 受動接辭 (Passive) 、PL 複數 (Plural) 、PRS 現在 (Present) 、PST 過去 (Past) 、SG 單數 (Singular)

補遺1 : Haspelmath (1993) に基づく北サーミ語の自他交替対応リスト

	英語	北サーミ語（自）	北サーミ語（他）	交替型
1	wake up	<i>lihkkat</i>	<i>boktit</i>	S
2	break	<i>doddjot</i>	<i>doadjit</i>	A
3	burn	<i>buollit</i>	<i>boaldit</i>	E
4	die/kill	<i>jápmit</i>	<i>goddit</i>	S
5	open	<i>rahpasit</i>	<i>rahpat</i>	A
6	close	<i>giddanit</i>	<i>giddet</i>	A
7	begin	<i>álgit</i>	<i>álggahit</i>	C
8	learn/teach	<i>oahppat</i>	<i>oahpahit</i>	C
9	gather	<i>čoahkkanit, čoagganit</i>	<i>čohkket, čoaggit</i>	A
10	spread	<i>leavvat</i>	<i>lebbet</i>	E
11	sink	<i>vuodjut</i>	<i>vuodjudit</i>	C
12	change	<i>nuppástuvvat</i>	<i>nuppástuhittit</i>	E
13	melt	<i>suddat</i>	<i>suddadit</i>	C
14	be destroyed/destroy	<i>dušsat</i>	<i>duššadit</i>	C
15	get lost/lose	<i>láhppot</i>	<i>láhppit</i>	A
16	develop	<i>ovdánit</i>	<i>ovddidit</i>	E
17	connect	<i>ovttastuvvat</i>	<i>ovttastahttit</i>	E
18	boil	<i>duoldat</i>	<i>duolddahit</i>	C
19	rock	<i>sugadit</i>	<i>sugahit</i>	E
20	go out/put out	<i>čáskat</i>	<i>čáskadit</i>	C
21	rise/raise	<i>badjánit</i>	<i>bajidit</i>	E
22	finish	<i>nohkat</i>	<i>loahpahit</i>	S
23	turn	<i>jorgasit</i>	<i>jorgut</i>	A
24	roll	<i>fierrat</i>	<i>fierahit</i>	C
25	freeze	<i>galbmot</i>	<i>galbmit</i>	A
26	dissolve	<i>luvvat</i>	<i>luvvadit</i>	C
27	fill	<i>dievvat</i>	<i>deavdit</i>	E
28	improve	<i>buorránit</i>	<i>buoridit</i>	E
29	dry	<i>goikat</i>	<i>goiket</i>	E
30	split	<i>luoddanit</i>	<i>luddet</i>	A
31	stop	<i>bisánit</i>	<i>bissehit</i>	E

略号 : A (Anticausative、逆使役型) 、 C (Causative、使役型) 、 E (Equipollent、両極型) 、 S (Suppletive、補充法)

補遺2：Nichols et al. (2004)に基づく北サミ語の自他交替対応リスト

	Plain	Induced	対応関係
1	<i>boagustit</i> 'laugh'	<i>boagustahttit</i> 'make laugh'	Augmented
2	<i>jápmit</i> 'die'	<i>goddit</i> 'kill'	Indeterminate (Suppletive)
3	<i>čohkkáit</i> 'sit'	<i>čohkkáhit</i> 'make sit'	Augmented
4	<i>borrat</i> 'eat'	<i>borahit</i> 'feed'	Augmented
5	<i>oahppat</i> 'learn'	<i>oahpahit</i> 'teach'	Augmented
6	<i>oaidnit</i> 'see'	<i>čájehit</i> 'show'	Indeterminate (Suppletive)
7	<i>suhttat</i> 'be/become angry'	<i>suhtadit</i> 'make angry'	Augmented
8	<i>ballat</i> 'fear'	<i>baldit</i> 'frighten'	Augmented
9	<i>čiehkádit</i> 'go into hiding'	<i>čiehkat</i> 'hide'	Reduced
10	<i>duoldat</i> 'boil'	<i>duolddahit</i> 'boil'	Augmented
11	<i>buollit</i> 'burn, catch fire'	<i>boaldit</i> 'burn, set fire'	Neutral (Double derivation)
12	<i>doddjot</i> 'break'	<i>doadjit</i> 'break'	Reduced
13	<i>rahpasit</i> 'open'	<i>rahpat</i> 'open'	Reduced
14	<i>goikat</i> 'dry'	<i>goiket</i> 'make dry'	Neutral (Ablaut)
15	<i>njulggodit</i> 'be/become straight'	<i>njulget</i> 'make straight'	Reduced
16	<i>heangát,</i> <i>heangasit</i> 'hang'	<i>heangáhit</i> 'hang'	Augmented/Neutral (Double derivation)
17	<i>jorgasit</i> 'turn over'	<i>jorgut</i> 'turn over'	Reduced
18	<i>gahččat</i> 'fall'	<i>gahčahit</i> 'drop'	Augmented

Remarks on Transitivity Alternations in North Saami

Ryo Umeda

ryo.umed@student.oulu.fi

Keywords: North Saami, Finno-Ugric, transitivity alternation, causative-inchoative alternation, labile verb

Abstract

This paper describes the basic characteristics of transitivity alternations in North Saami based on the lists of alternating verbs in Haspelmath (1993) and Nichols et al. (2004). According to the morphology, I classify the alternation patterns into four types, namely causative suffixation, anticausative suffixation, vowel alternation and suppletive. I also give an analysis on the direction of alternations in the framework of Haspelmath (1993) and Nichols et al. (2004) and conclude that North Saami is a transitivizing language. Labile verbs are not found from the lists of Haspelmath (1993) and Nichols et al. (2004), and the previous literature such as Julien (2016) states that North Saami has no labile verbs at all. However, I point out that North Saami has a possible labile verb and the usage of that labile verb may be influenced by Finnish. I claim that the emergence of this new labile verb is possibly a result of language contact and bilingualism between North Saami and Finnish.

(うめだ・りょう オウル大学)

